

キ

サ

サ

ゲ

(*Catalpa ovata*)



キササゲの種

昨年春に熊本の徳富記念園を訪れた。創立者新島襄が米国から取り寄せ(『新島研究』九三号)徳富蘇峰に贈ったカタルパ(アメリカキササゲ)は一六六〇年頃に枯れ、今二代目一本、三代目三本が七mもの大木となり、五月中旬には香りのよい白い花を咲かせる。一週間の開花期には連日数百人が訪れ、熊本の春の風物詩となっている。

同志社中学校の生徒作品集『キササゲ』創刊号(一九六五年発行)には、恐らく新島先生が植えられたであろう一世のカタルパが彰栄館南前庭に植えられている写真が載っている。以前は聚芳館(今の大学図書館)の横にあつたらしい。「幹の中は空洞で二つに裂け、片方の樹皮だけで命の樹液をくみ上げ、春には緑の芽を吹き出し、夏には淡黄色の花を咲かせ、秋にはささげ豆のよ

田島 繁
(中学校社会科教諭)

うな実をたわわに実らせていた。その生命力の強靱さに驚かされたが、一九六七年頃枯れてしまった」と。その後若木が七〇年春に植えられたが、礼拝堂の改修工事の時移植され根付かず枯れ、今彰栄館南東の庭園にあるキササゲは九三年春に植えられたもの。残念ながら一世のカタルパの種から育つたものではなく中国原産のものである。この写真は筆者が昨年六月二十五日に撮ったもので満開は一週間程。実際に花を咲かせている「キササゲ」を見て新島先生のことを思い出してください。キササゲは楸とも書き、秋に実を豊かに実らせるところから生徒の自由研究作品の表題に使っている。今はまだ小さいが、生徒たちと共にこれから大きく育ってほしいと願っている。